

寺田縄に住まう人々に 日枝神社の思い出を 聞きました。

神社名は、山王社という名称を、明治になって日枝神社と改称した。

ご神体は「風土記稿」に「木像 五寸」と記されているが、「石」だと思う。見た人はいないが、霊験あらたかのもので、見るものではない。

寺田縄日枝神社は、村民の信仰の中心だった。日や月を決めてお参りし、神社は村民からは崇敬されていた。日頃の平安を祈り、願掛けをした。

現在も、旅に出るとき、神様にお守りいただくためにお参りし、お賽銭を入れたお年寄り、また、入学祈願だったか、社殿の面前で手を合わせていた青年に出会ったことがある。

昭和20年の空襲で金田小学校が全焼し、勉強する教室が無く、分散授業で、神社が臨時の教室になった。お寺さんには疎開の児童が居たと思う。

神主さんは、伊勢原の大神宮から、平塚八幡宮に変更になった。いろいろな経緯があったようだ。八幡宮が担当するようになって、鯛などの生ものが供物として奉げられたのには、戸惑ったが、さまざまなしきたりがあるものと感じた。

日枝神社の神事などを司った伊勢原の大神宮の神主さんが代替わりになったが、継ぐ人が若く神社本庁の神職の資格を取っていなかったため、一時的に平塚八幡宮へ変更になった。資格取得後、大神宮から「直らないか」との話があったが、日枝神社の所在が平塚なので、平塚八幡宮が良かろうと決めて、今に続いている。飯島の八坂さん、長持の熊野さんも平塚八幡宮になった。昭和54年頃のことかもしれない。

平塚八幡宮は、神社への供え物が大神宮とはことなり、魚などのなま物も供えた。

歳旦祭（元旦の会）は、村中に開始時刻が告げられ、各家から一人は参列し、お宮さんの拝殿に入りきれないほどの大勢で、村民挙げて新年を祝った。皆がお供え物も持参した。

宮総代は誰もがやれるわけではなく、村を代表する旧家、地主さんたちが担った。今

のご時世では考えられない。村のことも、お金のかかることも地主がやり、小作人たちはそれに任せていた。

伊藤博文のようなひげをたくわえた、総代さん、子供が見ても威厳があった。

日枝神社のまつり

まつりは4月3日・4日で、なぜか雨になることが多かった。親戚の人たちも遊びに来るので、ガッカリしてしまった。「雨しごく」と云い、とにかく雨になった。その後は、御蔭さまで天気が続き、幸せになった。

米が取れない不景気の時には、神輿を出すことを自粛した。若い衆は、毎年担ぎたくて、お宮の寄り合いなどで「神輿は担ぐためにある」など、強い意見を主張し、意見が通り経費は若者の工面ということで担ぎ出したこともあった。

当時の青年会は、消防、水防等多方面を担当し、活躍し、村の原動力となり地域活動の主役だった。神輿の世話役は、当時の地主が担った。

まつりには、親戚全員が遊びに来て、家が一杯になるくらいだった。ろくな御馳走はなかったけれども、皆が集まるのが楽しみだった。まつりと節句が同じだったので準備に大忙しだった。

嫁に出た者は実家に帰れる楽しさと、親戚が集まり、泊まり込みだったので賑やかに過ごした。いつもは粗末なものを食べていたが、まつりと正月には御馳走が食べられるので、待ちどうだった。芝居見物の時には、重箱に料理を詰めて御馳走を食べた。

神社の境内には、まつりのために、急ごしらえの芝居の舞台が設置され、役者を呼び村芝居が奉納・公演された。

舞台の設置は青年会が中心になって、材料を調達し、自分たちの手で作り上げた。

平塚から役者を呼び芝居が掛かった。シバヤシ（芝居の役者）は、昼間の公演の時には、辺りが明るく、化粧などの「あら」が見えて困ると云っていた。出し物は、子供が父と別れたりする、泣かせる涙ものが多かった。

役者の食事は、村の役員や青年団が各氏子宅からお煮しめ、お赤飯、巻きずし、いなりずしなどを集めた。甘酒などもあって御馳走がいっぱいで、食べきれなかったようだ。

吉祥院が宿になった。終戦後は、芝居を呼べず、演芸会めいた余興をやり、その後はカラオケ、抽選会などに代わったが楽しかった。

娯楽の少ない当時、まつりの芝居は楽しみだった。舞台の前に“むしろ”を敷いて見やすい場所をとる、むしろには、屋号とか名前を書いて目印にしたものだった。

出し物は、家族が分かれ離れになるような涙ものが多かった。

お宮の境内は人でいっぱいになるほど賑わった。他の村から見物に来たし、自分達も親と一緒に家中で他の神社のまつり見物に行った。南原のまつり、遠くは須賀の親戚へ、とにかく、おまつりと芝居が楽しかったし、楽しみだった。親からは、「よく働けよ、芝居に連れて行くから」といわれていた。

当時は、平塚の映画は高くは見られなかった。平塚へのバスは一時間に一本、たいていは歩いて行った。バスに乗ると「あの家は金がある」と評判になった。

参道には露店がならび、ヨーヨー、金魚すくい、あめやお菓子の「一文菓子」が売られていた。露店が沢山で、神輿の宮出しが大騒ぎになるくらいだった。

まつりの当日は、学校が早く終わり、買い物をしたり、芝居を見たりした。小遣い銭はわずかで、兄妹が大勢だったので、それぞれが別々の菓子を買って、交換しながら、芝居見物をした。

村人の生活は苦しく、貧しい人も多かった、まつり、正月や冠婚葬祭に大酒を飲み、道路に酔いつぶれていた人も見かけた。普段でできなかったので、この時とばかり飲み食いしたようだ。

時が経ち、テレビなどの娯楽が増え、奉納芝居の人气が落ちて、公演されても見物客が減少した。今では、まつりの夜、奉納芝居に代わって大抽選会が催され、天気が悪くても沢山の人達が「一等」を目指して集まっている。

儀式、お参りなど

よそからお嫁さんが寺田縄に来ると、神社にお参りし、吉祥院の金豊住職の祝詞を頂き、その後、親戚に挨拶まわりをした。その華やぎに町の中が賑わった。打掛での挨拶まわりなので、時には、「はなっぴき」という打掛を引きずらないように手助けをして歩く人もいた。

召集で戦地に赴く兵士を、村人総出でお宮さんから送り出した。出征兵士の決意を示すあいさつもあった。村を出るときは寺田縄の「出口」(東橋)からではなく、長瀬の秦野道からだった。敗戦濃厚になった時には途絶え、スパイに知られないようにこのことか、夜、人知れず出征した人もいた。

吉祥院の金豊住職は、神社のことを気にかけてくれていて、竹箒をもって、毎朝神社掃除をしていた。

神社は遊びの場

日枝神社の鳥居は、大正8年に作られ、神社は遊び場でもあった。縄跳び、かくれんぼ等で遊び、ブランコがあった。

神社は鍵がかかっていなかったのだから、出入り自由だった。学校が終わってからの遊び場の一つだった。学年を越えて皆が集まり、いたずらもした。

今だから話せるが、太鼓に「へのへのもへじ」のいたずら書きをして、祭事の時など、神主さんが何食わぬ顔で太鼓をたたいていたのが、今でも、おかしく思い出せる。悪いことをしたものだと思っている

お社の縁の下にも潜り込み冒険したり、アリジゴクを掘り返したりした。

夏には、セミがたくさん集まり、うるさいくらいに元気のいい鳴き声が聞こえた。今で思えば、セミ取りのメッカだった。

神社の掃除を1年生がやっていたが、終戦後は、神社ではなく通りの掃除に変えられた。神社掃除をやると、校長先生が首切り(辞めさせられる)になると云われ、300mほどの通りを箒で掃いた。なぜだかは、幼な心には理解できなかった。首切りの言葉も聞きなれてはいなかった。

現在、お宮さんの掃除には、神社総代、山王会、元気な子供連れの育成会の方々が協力して月に一度行っている。大人と子供のふれあいの時の一つになっている。

境内に「神楽殿」が設けられ、手作りの大人神輿と子ども神輿が安置され、まつりの時を待っている。